

日本古代の囲碁史に関わる文献資料リスト

小澤 一徳
増田 忠彦

はしがき

現状の囲碁史は近世以降に研究の重心がおかれている。これは中世以前の囲碁界には、算砂や秀策のような華々しい棋士がいるわけでもなく、(こんなことを言うと「寛蓮の亡霊」に怒鳴られはすまいか)棋譜も伝わらない古代については、研究の入り口が見えにくいという事情からでもあろうか。

そこで本稿では、古代囲碁史研究の入り口を示すために、日本古代(平安末期まで)の囲碁史に関わる基礎資料リストの作成を試みた。

古代に記されて語り継がれる「囲碁話」を、その内容や資料に応じてテーマ別に項を分けて記した。それぞれの「囲碁話」を記す箇所は、「目次」の項で判断できるように努めたつもりである。

各リストには、古代日本の「碁話」について同時代に成立した資料を挙げ、続けて同じ碁話に言及した近世までの資料を付記した。また、末尾には[付載]として、明治期以降に「古代の囲碁史」に言及した研究資料を[明治以降発行の書][逐次刊行物の囲碁史論考]として記した。

稿者、小澤と増田の二人は東都・多摩地区に住し、互いに趣味とする将棋史と囲碁史との勉強を通して十数年の交流を続けている仲。二人は、国会図書館や都立図書館で落ち合ってはダベリ合い、夜の居酒屋で言論奮発を楽しんできた。そのようなアカデミーとは無縁の論考が、当学「紀要」に載せるに値する内容であるかを危惧する。

この稿を編するに当たって、二人はテーマや項目を分かち合うことはせず、互いに全体の稿を草

し、突き合わせて修正しながら仕上げた。強いて作業分担したことを言えば、老年の増田は「自家の資料をひっくり返して探索する」ことを主にし、壮年の小澤が「図書館通いの探索と点検」を担当した。従って稿全体の文責は、二人が共同に負うこととなる。

なお、投稿の編集編纂は、平成27～28年度大阪商業大学アミューズメント産業研究所研究費を受けて行ったものである。

稿は、碁話・文芸ジャンル・研究テーマなどに応じて記している。頭から見ていただく必要はない。「目次」を参照されて、各自のご興味にかなうテーマからご覧いただき、原典の古典も楽しまれて、古代碁史の森へ分け行っていたいただければ幸いに思う。

【日本古代の碁史に関わる文献資料リスト】

目次

(1) 碁伝来	279
(2) 律令の碁	280
(3) 僧侶の碁話資料	281
(4) 『古事記』『万葉集』の「碁の字」	284
(5) 碁石の産地	285
(6) 吉備真備の碁伝説	288
(7) 古代の上手・碁伝	289
(8) 正倉院宝物の碁器	292
(9) 漢詩の碁	294
(10) 宮中及び貴族の碁話を記す資料	294
(11) 辞書・故実書・史書に見える古代の碁	300
(12) 和歌の碁	300
(13) 歌謡・連歌・俳諧・雑俳	301
(14) 物語、その他	301
(15) 碁の賭物・碁手銭・儀式の碁盤	304
(16) ルール	310

[付載]

「古代の囲碁に言及する近代の資料」

- (1) 明治以降発行の書 312
(2) 逐次刊行物の囲碁史論考 313

(1) [囲碁伝来]

(稿者注...今日、囲碁の伝来は「百済渡来説」が定説であろうか。ただ、『続日本紀』ほかの史書には、遣唐使・吉備真備が「極めて多くの中国の文献・器物をもたらした」ことが記されていて、真備を「囲碁伝来」に結びつける資料も少なくない。特に近世の資料は、「真備伝承」を採るものが多い。明治期以降の論考を総合すると、「遣隋使・遣唐使は文化・文物を学ぶために派遣されたのだから、囲碁の技を習得もし、碁器ももたらした」と考えるのが自然だが、「朝鮮渡来人による伝来」との先後を明確に確認できる史資料は見当たらない)

(以下、伝来に言及する資料を挙げる)

『本朝事始 (伝・藤原道憲著)』(百済渡来説「囲碁は、百済から渡来した博士・阿和直がはじめて仁徳天皇に教えた」とする)

『続日本紀』『扶桑略記』『公卿補任』(吉備真備のもたらした文献・器物を挙げ、真備のもたらしたものは、「種々の書籍や要物は書き尽せない」と記すが、碁器や棋書の名は見えない)

『慶長見聞録 (1614年・三浦浄心著)』(吉備真備伝承説)

『拮抗集 (1688年刊)』(吉備真備伝承説)

『人倫訓蒙図彙 (1690年刊)』(吉備真備伝承説)

『中華事始 (1714年没・貝原益軒著)』(双六伝来を真備とする)

『和漢三才図会 (1713年頃・寺島良安著)』(吉備真備伝承説)

『本朝世事談綺 (1734年・菊岡沾涼著)』(吉備真備伝承説)

『囲碁雑編 (1786年・河村秀根著)』(百済渡来説)

『古今要覧稿 (1842年成立、屋代弘賢ら編)』(百済渡来説)

『皇国名医伝 (1852年・浅田宗伯著)』(百済渡来説)

『囲碁事蹟考 (江戸末期・加納諸平著)』(百済渡来説)

『爛柯堂棋話（江戸末期・林元美著）』（百濟渡來說）

（明治期以降の資料）

「細注日本囲碁史綱」（関節蔵、『囲碁世界』1909年7月～1910年3月、未完）

「囲碁本朝渡来に就いての考察」（高橋敬光、『棋道』1929年7月～9月）

『囲碁伝来記』（野上彰、1940年、天元社）

『囲碁伝来考』（編者不詳、明治期稿本）

『中国囲碁史集成』（香川忠夫、2004年刊）

（中国の書）

『隋書』『北史』（倭人碁博を好む）

（2）【律令の囲碁】

（稿者注…現在の囲碁は文化の一翼を担うが、ときに頭脳スポーツと称されることもある。折々の歴史社会で囲碁の位置づけは変わる。古代においては法体系である律令（律＝刑法、令＝行政法）が、囲碁の時代的位置づけを探るヒントになる。嚆矢の『大宝律令（701年）』には成文が伝わらないが、これと大差なしとされる『養老律令』が部分的に伝存し、「僧尼令」ほかで「雑戯は禁ずるが琴と囲碁は限りの外とする」とする）

『養老律令（718年頃成立、758年施行）』（「僧尼令」ほかで、「雑戯は禁ずるが琴と囲碁は限りの外とする」）

『令集解（律令の註解書）』

（以下、律令の囲碁記事に関する後世の言及資料）

『法曹至要抄（坂上明基・1210年没の撰）』

『金玉掌中抄（中原章任・1319年没の著）』

『令抄（一条兼良・1481年没の著）』

『後妙華寺殿令聞書（一条兼良 述）』

『南嶺子（1749年成立、多田義俊著）』

『講令備考（1825年頃成立、稲葉通邦他共著）』

(3) [僧侶の碁話 資料]

(稿者注...現在、囲碁普及の必要がしばしば言われるが、囲碁が一般に楽しめるようになったのは近世以降ここ400年ほどであり、それ以前の時代がはるかに長い。古代においては、囲碁の享受者は特権階級である宮中・貴族と僧侶(知識人)に限られていたことが、資料から読み取れる。ここには僧侶の碁話に言及する資料をまとめた。徒然の慰め、賭けの対象として、また奇瑞・奇跡のモチーフとしても囲碁が語られている)

○ [留学僧・弁正の碁話]

『懐風藻(751年成立、最初に編まれた漢詩集)』(留学僧・弁正の詩を載せ、その「序詞」の中に「弁正の人となり」「囲碁の技量に長じていたため、帝位に就く前の玄宗に賞遇された」ことを記す)

(後世の言及資料)

『大日本史(1697年成立)』・『本朝高僧伝(1702年成立、師蛮編)』・『日本詩史(1771年成立、江村北海著)』・『皇国名医伝(1852年成立、浅田宗伯著)』・『囲碁事蹟考(江戸後期成立、加納諸平著)』

○ [口歪む僧(748年頃)]

『日本靈異記(822年頃成立、仏教説話集)』(2話ありその第1話「僧が囲碁対局の最中に法華経を唱えて喜捨を乞う者がきた。この者を嘲り笑った僧は、打つ度に碁は負け、口が歪んでしまった」、第2話「勤勉に法華経を誦する僧の名をひやかしながら碁を打っていると、口が歪んでしまった」という逸話を載せる)

(同話に言及する資料)

『三宝絵(984年成立)』・『大日本国法華経験記(1014年頃成立)』・『今昔物語集(1100年頃成立)』・『元亨釈書(1322年成立)』・『本朝高僧伝(1702年成立)』・『山城名勝志(1705年成立)』

○ [空海(835年没、僧の囲碁を禁訓)]

『御遺告(835年成立、死の直前に弟子たちに示した遺訓)』(僧は「囲碁双六は停止すべし」と遺誡する。貴族の賭物を供する囲碁流行が、死を前にした空海の目に余るような状態になっていた風潮世相に対するものとされる。なお、遺誡は一般信徒の禁制には触れて

おらず、「教義として囲碁を排除するものではない」ともされる)

『三教指帰(797年、空海24才、戯曲形式の処女作)』(儒者が遊蕩児の非行を「博奕の様は竹林の七賢人・阮籍をすら超える」と批判する。阮籍には「母親の訃報に接して、打ちかけの賭碁を止めなかった(『晋書』)」の逸話がある)

(以下、後世の言及資料)

『大師御行状集記(1089年成立)』・『紀伊国名所図会(1790年成立、高野山の禁制にふれる名所記)』・『梵網経講義(『大蔵経講座』所収、囲碁を戒める「優婆塞戒経」に言及)』・『三国事蹟除睡鈔(1721年成立、「優婆塞戒経」に言及)』

○[空也上人(972年没、碁盤の奇瑞)]

(空也上人が訪問先で留守番をしていた稚児を「囲碁でも打って慰めてやろうと碁盤を持ってくるように命じるが、重くて稚児は運べない。上人が数珠を盤の上に置かせると、碁盤は歩いてやってきた)

『撰集抄(1250年頃成立、著者を西行法師に仮託する説話集)』・『壺囊鈔(1446年成立)』・『三国物語(1667年成立、巻二「空也上人の法力の事」)』・『空也上人絵詞伝(江戸前期成立)』

○[囲碁は日を送る戯(984年)]

『三宝絵(984年成立、源為憲著、十九歳の尼・尊子内親王に献進した絵入り仏教説話集)』(序文に「春の日永、秋の長夜の徒然を慰めるもの」として囲碁をあげる)

○[円賀(989年没、碁盤の奇瑞)]

(仏法奇瑞の話、関白藤原頼忠亭に招かれた円賀、仏家の奇瑞を望まれ、碁盤の上で独鈷を躍らせて見せた)

『元亨釈書(1322年頃成立)』・『本朝高僧伝(1702年成立)』・『真言伝(『大日本史料』収)』

○[増賀上人(1003年没、臨終の碁)]

(増賀上人は参議橘恒平の子で多武峰に住し多武峰先徳ともいわれる。伝記には「名利を嫌い奇行譚を多く残す」と伝えられる。以下の資料には、臨終に年来の望み通り「碁を打って往生

した」という逸話を載せる)

『大日本国法華経験記(1040年頃成立)』・『続本朝往生伝(1100年頃成立)』・『今昔物語集(1120年頃成立)』・『発心集(1200年頃成立)』・『百因縁集(1257年頃成立)』・『和州多武峰寺増賀上人行業記』

○ [因幡堂の碁盤 (1003年の逸話)]

(因幡堂の通称で知られる平等寺、本尊の薬師如来立像は1003年、碁盤の上に鎮座して遠く因幡の国から飛来した。近世の京案内名所記の類に載り、俳諧や雑俳にも詠まれている)

『京童(1658年成立、名所記)』・『洛陽名所集(1658年成立、名所記)』・『扶桑京華志(1665年成立、名所記)』・『出来齋京土産(1677年成立、名所記)』・『京師巡覧集(1679年成立、名所記)』・『山城名所寺社物語(1757年成立)』・『開帳花くらべ(1773年成立)』・『花洛羽津根(1863年成立)』・『あぶらかず(1643年成立、貞徳編の俳諧集)』・(俳書 6 編、雑俳書 5 編は省略。これらは『囲碁語園(2009年、大阪商業大学刊)』に載)

○ [囲碁三昧の僧、焦熱地獄に落つ (1040年頃の逸話)]

(殺盗・淫妄・飲酒になずみ、連日双六・囲碁を欠かさぬ悪僧。死んで蛇となり焦熱の苦しみを受ける)

『大日本国法華経験記(1040年頃成立)』・『今昔物語集(1120年頃成立)』

○ [僧正・深覚、囲碁対局の療治で危篤患者が蘇生 (1043年頃)]

(深覚僧正が関白・教通の危篤に参上し、囲碁対局で患者は蘇生した)

『今鏡(1170年頃成立)』・『本朝高僧伝(1702年成立)』

○ [僧覚念、囲碁を愛し大往生 (1050年頃)]

(天台の僧・覚念は囲碁を愛し、出世はのがしたが大往生をした)

『拾遺往生伝(1104年頃成立)』・『本朝高僧伝(1702年成立)』・『後拾遺往生伝(1140年頃成立)』

○ [留学僧の碁話 (1073年)]

(天台の僧・延暦寺阿闍梨、藤原頼通の護持僧などを務めた成尋。商船で渡宋した囲碁の日記)

『参天台五台山記 (1073年、天台の僧成尋の渡宋日記)』

○ [達磨の囲碁逸話]

(1100年頃成立の『今昔物語集』に、天竺のダルマが囲碁を愛したという逸話を載せる)

『今昔物語集 (1100年頃成立)』・『宝物集 (1190年頃成立)』・『宇治拾遺物語 (1200年頃成立)』・『搥囊鈔 (1446年成立)』・『慶長見聞集 (1614年成立)』・『醒睡笑 (1628年成立)』・『堀河之水 (1692年成立)』

○ [僧・増誉 (1116年没) 囲碁対局で重患を放置]

(僧・増誉は藤原経輔の子、白河法皇の信を得て円城寺僧正から延暦寺座主を務めた。囲碁対局中に急患の幼児来たが対局終わるまで放置、対局後に「不発不発」と揺すり、子の瘡は治った)

『本朝高僧伝 (1702年成立)』・『囲碁事蹟部類鈔 (江戸末期成立)』

○ [鳥羽僧正 (1140年頃)]

(1140年に没した絵かきの大僧正・覚猷〈鳥羽僧正〉の逸話。僧正は藁を浮かべた湯舟に飛込む癖があった。甥子がいたずらして空にした湯舟の底に碁盤の足を上にして入れて置いた。そこへ外から帰宅した僧正が飛込み、碁盤の足に尾てい骨を打つけて気絶した。なお『鳥獣戯画』には碁の絵もある)

『宇治拾遺物語 (1200年頃成立)』

(4) [『古事記』 『万葉集』 の「碁の字」]

(稿者注... 『古事記』の「都麻碁微爾・つまごみに」「淤能碁呂志摩・おのごろしま」などの真仮名の「碁」の字。『万葉集』の歌詞「碁檀越往伊勢国時、留妻作歌一首」「碁師歌二首」の「碁」の字句の解釈。囲碁史の関連の資料では、「囲碁」との関りを解くものが多いが、古来の国文学者の言及では「囲碁」に結ぶ学説はみない。囲碁史探求の立場からは未解決の課題で

あろう)

[『古事記』]

(『古事記』の「碁」は「淤能碁呂島」が2個所のほか、計16ヵ所に見える。いずれも真仮名で、字の義とは無関係の音読の使用。ただ「碁」の字と関連させて、古事記が成文化された時代にはすでに囲碁は伝わっていたであろう、と説く囲碁書は多い)

『古事記』(長い編纂過程を経て712年完成とされる)

『古今要覧稿(1842年成立、幕府の命でとりまとめた書)』(「於乃碁呂嶋と碁字を古の仮名にかりもちひられたるを見れば、其比専ら流行して行はれたるものならんか。さあらでは、ふと書き出づる仮名に耳遠き字を用ふべきことかは…」とある)

[『万葉集』]

(『万葉集』にも『古事記』同様、囲碁の義ではない真仮名の「碁」の字が散見する。このほか歌題の2ヵ所に「碁」の字があり、これは「囲碁」の意とする資料がある)

『万葉集』(全20巻の完成は806年だが、前半の16巻は750年頃には成立していたとされる)

(巻4、500番の歌題「碁檀越往伊勢国時、留妻作歌一首」の「碁檀越」は「施主の碁という人物」とする資料がある。また、巻9、1732・3番の舟歌2首の題詞「碁師歌二首」の「碁師」は、遣唐使の「碁師」と解する説もある。ただ、古来からの万葉学者の定説では、これらの「碁」の字を「囲碁」と結びつけるものは見えない)

(「碁師」についての資料)

『日本三代実録』(字句「碁師」について「伴宿禰少勝雄、弈碁を善くするを以て、延暦聘唐の日、使員に備う。碁師たるを以てなり」とする)

『囲碁事蹟考(江戸末期成立、国学者・加納諸平編)』(「碁の上手とはおぼしけれど未祥」)

『囲碁事蹟部類鈔(江戸末期成立)』(「碁師は能書を手師といふが如く碁の高手なるべし」)

『細注日本囲碁史綱(関節蔵、1911年成立)』(「碁師歌の意味は船中遠行の客吟である、或は本土を離れて外国に渡海したのではなからうか」とする)

(5) [碁石の産地]

(稿者注...発祥の地・中国の碁石は木製で「碁」の字が一般、遅れて伝来した日本のそれは「貝」か「石」が一般であるところから「碁」の字だとされる。〈漢詩などには、一種の気取りからであろう「碁」「棋」も多い〉古代の碁石の様子を『風土記』にさぐる)

[風土記の碁石]

- 『続日本紀(713年5月2日の条)』(風土記編纂を詔命、「風土記」はこの後の編纂)
- 『出雲風土記(「嶋根郡」の条)』(「玉結浜〈たまゆいのはま、現・松江市美保関〉。一百八十歩。[碁石あり。東辺に唐砥あり。又百姓の家あり]」とあり、「石」である)
- 『常陸風土記(「多珂郡」の条)』(「郡の南廿里〈別本・卅里〉に、藻島の駅家あり〈現・茨城県多可郡十王町伊師の小貝浜〉、東南の浜に碁子あり、色は珠玉の如し、所謂常陸国に有る所の麗しき碁子は、唯是浜のみ、昔、倭武天皇は、舟に乗り海に浮び、島の磯を御覧するに、種々の海藻が多く生い茂栄す、因て名づく、今亦然り」とあり、やはり「石」である)

(後世の言及)

- 『出雲風土記鈔(1683年成立、岸崎時照著)』(「玉結浜、今玉江浜、黒色碁子石今猶在矣。唐砥玉江と片江之間笹子浦猶亦在矣。」と、江戸時代も「石」があると考証する)
- 『鹿島志(1823年成立、北条時隣著)』(「碁石浜、『例伝記』に「鹿島崎といふは東の荒海にて、碁石多く寄せ来る磯浦なり。碁石浜ともいふ」云々[また大神この所にて、外国の鬼と碁をうちたまふなど云ふ俗説あり]、常陸碁石は世に名高し。今もなほいと美麗き小石この辺におほかり。碁石の出づる浜はこの外、『風土記』の多珂郡、『出雲風土記』の嶋根郡などにみえ、伊勢国烏崎は西行法師の歌によめり」などと考証する)

(上記文中の西行法師の歌集を記す)

- 『山家集(1180年頃成立の家集、巻3の条)』(「雑、伊勢のたふしと申す島には、こいしのしろのかぎり侍る浜にて、くろはひとつもまじらず、むかひてすがじまと申すは、くろのかぎり侍るとなり」

すが島や答志のこいしわけかへて 黒白まぜよ浦の浜かぜ

鷺島のこいしの白をたか波の たふしの浜に打ちよせてける

烏崎はまのこいしと思ふかな 白もまじらぬすが島の黒

あはせばやさぎとからすとごをうたば たふし(答志)すが島くろしろのはま)

(稿者注...西行の右の歌は、碁石の産地の考証とも結びつき後年の随筆類に多く引用されている)

- 『新撰陸奥風土記(1860年成立、保田光則著)』(一、碁石浜の黒碁石、気仙郡末崎村にあり。白石八此辺鷗居と号する嶋在り、其嶋の上池中に碁子の白石を出す。...
「碁子」風土記云、多珂郡藻島の駅家の東南浜、碁色珠玉の如く所謂常陸国に有る所の麗碁

日本古代の囲碁史に関わる文献資料リスト

子、唯是の浜のみ、今の伊師町伊師本郷石瀧伊師浜は、皆古の藻島なり、伊師を名とするは、蓋し碁子を出すゆへなり、この碁子を出す浜は、川尻村の半里東にあり、川尻は伊師浜の南にあり、小貝の浜とも、碁石浜とも称す、種々の小貝五色の小石あり、砂も常の砂よりは、甚大粒にして金銀の光あり、...)

(関連資料＝「風土記」など「碁石の産地」に関わる、その他の資料)

- 『いほぬし(庵主)(950年頃成立)』(僧・増碁の紀行文、紀州吹上浜の碁石の記事)
- 『日本一鑑(1556年、中国明から渡来の鄭瞬功編)』(豊後の特産品として「碁子」を挙げる)
- 『和漢三才図会(1712年成立)』(「日本国より玉の碁子を貢す。言ふ、本国南に集賢島あり。上には手談の池あり。池の中より碁子を出す。[大中は本朝仁明天皇の時代にあたる。集賢島は詳らかならず。紀州那智の浜か]」)
- 『広益俗説弁(1715年成立)』(「俗説云、もろこしの書に出たる手譚池は、豊後国佐賀関の白浜・黒浜の事をいふ。今按るに、手譚池は豊後国佐賀関にあらず。肥後天草にありと云。『韻府群玉』云、手譚池、日本国有凝露台。台上有手譚池。池上有玉碁子。不由制度黑白分明」)
- 『西遊記(1795年成立)』(「日本に手談池といふ有り。其池中に集真嶋あり、其嶋上に凝露台有り、此台辺、皆此冷暖玉なり。帝も希代の珍宝なりとて、甚是を愛し給ふと云。此事、八紘記史(清朝の地理書)など、其外唐土の書籍に多く見えたり...」つづけて著者自身の紀行見聞を記す)
- 『年中故事(1800年成立)』(「豊後国海部郡佐賀関速吸名門と云 当所に黑白の浜といふ有、碁石の名産地也、黑白は日月也、一昼夜の天文、其神鎮座の地にあり、是黑白少しの離を隔て、純白純黒少しも不雑、...」)
- 『熊野巡覧記(1794年成立)』(「秋津浦、佐野村の前なる濱也、那智黒と云碁石此濱より出る也、...」)
- 『豊後国志(1804年成立、幕府に提出した地誌)』(碁石算出する浜6か所を挙げる)
- 『静寄余事(1800年頃成立、関連文、略)』・○『技癢録(1802年成立、関連文、略)』
- 『齒海漁談(1807年成立、関連文、略)』・○『爛柯堂棋話(江戸後期成立、関連文、略)』
- 『甲子夜話(1814年、松浦静山著、関連文、略)』・○『松亭漫筆(1850年成立、関連文、略)』

(6) 【吉備真備の囲碁伝説】

（「1、囲碁伝来」でふれたように、吉備真備囲碁伝承説は彼の死後300年以上を経た『江談抄』（1111年没・大江匡房談話を蔵人藤原実兼が聞き書きの録）が初出。大江匡房は平安後期の漢学者で、『江談抄』には歴史や故実の考証に利用される硬い話が多いが、天皇のセックス話のごとき逸話もある。『江談抄』に載る各断章は短い。ただ、この真備の囲碁話だけは唯一と

いっていい長文で、内容がまた奇想天外な怪奇小説である。

この奇話をどう見るのか。たとえば、ここに大陸との関係性の变化を伺うことはできるだろうか。「奇話」は後世に「より奇怪、より面白く」加工・翻案された書が編まれる。これらも踏まえて、近世の囲碁史料には、当初の百済渡來說＝渡来人持ち込みという受動性が、吉備真備持ち帰りという能動性に置き換えて捉える言及も少なくない）

『江談抄（1104年頃成立、大江匡房の談録、第三「雑事」の九七に「吉備入唐間事」』（冒頭「吉備大臣入唐し道を習ふ間、諸道芸能に博達し聡慧なり。唐土の人頗る恥ずる気あり。…」と始まる奇談。唐の官人たちは真備を辱めようと種々の難題を彼に強いる。既に唐土で死んでいた留学生・阿倍仲麻呂の霊が鬼となって現れて真備を助け、真備は難なくそれらの難題をクリアしてしまう。「唐人議して云はく、『才はありとも芸は必ずしもあらず。囲碁をもつて試みんと欲す。』…」と、漢人は最後の難題として真備に唐人との囲碁の試合を強いる。鬼は真備に囲碁の手ほどきをする。「唐土の囲碁の上手らを撰定し集めて打たしむるに、持にて打ちて勝負なき時、吉備偷かに唐の方の黒石一つを盗みて飲みたり。勝負を決せむと欲する間、唐負け了んぬ。…」と、真備は「持碁の石をごまかして」この難題もクリアしてみせた。なお付言すれば、「黒石一つを盗んだ」の条からは、当時の囲碁ルールに関わる問題をも提起しているようである）

（後世の類書、言及書）

『長谷寺靈驗記（1192年成立、長谷寺縁起）』（大江匡房の没年（1111年）からそれほどの隔たりはない。内容は原話に忠実で、この奇態な話が寺の縁起にまでされるということは、当時すでに話は伝説化して広く世間に知れ渡っていた証しであろう）

『吉備大臣入唐絵巻（中世期成立の絵巻）』・『吉備大臣物語（中世期成立）』・『本朝智恵鑑（1713年成立、北条団水著）』・『安倍清明物語（1662年成立、浅井了意著）』・『南都名所集（1675年成立、名所記）』・『安部野仲磨入唐記（1757年成立、沙門誓誓撰）』

日本古代の囲碁史に関わる文献資料リスト

(謡曲) = 『吉備』・『吉備公』

(和歌集) = 『明日香井和歌集』・『熱田万句・寛永十四』

(俳諧) = 『貞徳俳諧記』・『望一後千句』・『独吟一日千句』・『鶴の隣』・『俳諧塵塚』・『俳諧天狗問答』

(雑俳) 『広原海一四』 (他多数)

(稿者注... 史実とは無縁の奇想説話で、種々分野の文芸資料に引かれている。上記の他にも、連歌・俳諧・雑俳に詠まれたものは多い (100句余)。それらは『囲碁語園』に載)

(7) [古代の上手・囲碁伝]

(古代の上手と碁話資料をここにまとめる)

○ [藤原武智麻呂の碁伝 (737年没)]

『武智麻呂伝 (760年頃成立、延慶著)』 (武智麻呂は不比等の長子、母は曾我氏の女で、藤原南家の祖とされる人物。聖武天皇が皇子の時に教育係を勤め、長屋王の変では天皇を糾問した気骨の人物ともされる。変の後は実権を握って正一位左大臣に上る。その伝記に「毎(つね)に恬淡を好み、遠く憤閑(かいどう・乱れ騒がしい)を謝る。或る時は手談して日を移し、或る時は疲覽して夜を徹しぬ」と「手談」の字句がある)

○ [囲碁で殺傷事件 (729年、738年)]

『続日本紀 (729年2月10日の条、738年7月10日の条)』 (奈良時代後半の729年、後の歴史に語り継がれる政争「長屋王の変」。事件とかかわりを持つ二人の下級官人が、囲碁の対局中に起こした刃傷沙汰を記す)

(後世の言及書)

『大日本史 (卷百十七 「列伝・長屋王」)』・『前々太平記 (1715年成立)』・『閑際筆記 (1715年成立)』・『和漢三才図会 (1712年成立)』・『本朝世事談綺 (1734年成立)』・『爛柯堂棋話 (江戸末期成立)』

○ [藤原広嗣の五異七能 (740年没)]

『松浦廟宮先祖次第并本縁起 (佐賀県松浦宮縁起)』 (広嗣の人間離れの異能ぶりを記す条。常人と異なるものを五つ、勝れた才能を七つあげ、その「異」の第二に「宇佐八幡の祀神を囲

碁で慰めた」とある)

○ [伴少勝雄 (804年～839年頃、遣唐使 碁師)]

『日本三代実録 (貞観 8 年 9 月 22 日の条)』

『続日本後紀 (839年10月 1 日の条 = 伴少勝雄と展覧の勝負後)』

『西宮記 (839年10月 1 日及び844年10月 1 日の条)』

『葬庵随筆 (1772年頃成立、本居宣長著)』

(稿者注...上の 3 書の記事は、当時の上手・伴少勝雄と伴須賀雄との宮中对局を記すもの。これらは後の「〈目次・10〉 宮中の碁話」に記事を記している。そちらを参照されたい)

・『塩尻 (1733年頃成立)』・『翁草 (1791年成立)』

(明治以降の書)

『日本囲碁史綱 (関節蔵、明治42年から雑誌『囲碁世界』連載)』

○ [伴須賀雄 (839年・844年、伴少勝雄の縁者、遣唐使 碁師)]

『続日本後紀 (上記と同)』・『西宮記 (上記と同)』・『葬庵随筆 (1772年頃成立、本居宣長著)』・『塩尻 (1733年頃成立)』・『翁草 (1791年成立)』

(稿者注...この遣唐使 伴氏 2 人の天覧の碁は、江戸期の雑排集『ケイ』にも 1 句詠まれている)

(明治以降の書)

『日本囲碁史綱 (関節蔵の論考、明治42から『囲碁世界』連載)』

○ [日本の王子 (唐の名人との対局伝説、850年頃)] (中国の史書に「日本の王子が入唐し、碁器を献上。さらに待詔顧師言と対局した」という逸話を記している)

(中国の書に載せる記事)

『杜陽雜編 (中国書)』・『舊唐書 (中国書)』・『冊府元龜 (中国書)』・『日本一鑑 (中国書)』・『異称日本伝 (1688年成立)』

(以下の資料は、前の [風土記の碁石] 掲載資料とダブル)

『和漢三才図会 (1712年成立)』・『広益俗説弁 (1715年成立)』・『西遊記 (1795年成立)』・『年中故事 (1800年成立)』・『熊野巡覧記 (1794年成立)』・『静寄余事 (1800年)

日本古代の囲碁史に関わる文献資料リスト

頃成立)・『技癢録(1802年成立)』・『菡海漁談(1807年成立)』・『爛柯堂棋話(江戸末期成立)』・『松亭漫筆(1850年成立)』・『豊後国志(1804年成立)』

(明治期以降の書)

『日本囲碁史綱』・『中国囲碁史料集成(2004年、香川忠夫著)』

○[和気貞臣(853年没、和気清麻呂の孫)](『日本文徳天皇実録』の「和気貞臣卒伝」に「...小芸に留意せず、ただ囲碁を好む。敵と対し交手するに、日暮れて夜の深むを覚えず」と記す)

『日本文徳天皇実録(853年4月14日の条=和気貞臣の卒伝)』・『大日本史(1657年徳川光圀編集開始、1906年完成の史書)』・『爛柯堂棋話(江戸末期成立)』

○[紀夏井(866年、応天門事件で流罪)](「応天門事件」を記す史書に載る「紀夏井の伝」に、「稚より才思あり、...兼て又、雑芸をよくし囲碁をよくす、伴勝雄奕碁を能するを以て唐使の員に備はる、碁師を以ての故なり、夏井十余才、囲碁を勝雄に習ふ、一二年の間に勝雄に超たり。...」と、その囲碁の才能を記す)

『日本三代実録(866年9月22日・応天門事件の関係者を処断する条)』・『本朝語園(1706年成立)』・『扶桑蒙求(1710年成立)』・『爛柯堂棋話(江戸末期成立)』

○[寛蓮(904年頃)]

(宇多法王に近侍し、醍醐天皇との「金の枕の賭碁」などの多くの囲碁逸話を古書に見る、寛蓮。その碁話を載せる資料)

『西宮記(904年9月24日の条=寛蓮殿上の賭碁)』・『東宝記(東寺の結構事跡の記録)』・『大和物語(951年頃成立)』・『大鏡(1025~1065年成立)』・『源氏物語(「手習の巻」)』・『源氏釈(1170年頃成立、源氏古注)』・『紫明抄(1290年成立、源氏古注)』・『河海抄(1365年頃成立、源氏古注)』・『仙源抄(1381年成立、源氏古注)』・『類字源語抄(1431年成立、源氏古注)』・『花鳥余情(1472年成立、源氏古注)』・『一葉抄(1495年成立、源氏古注)』・『浮木(1537年成立、源氏古注)』・『明星抄(1550年成立、源氏古注)』・『紹巴抄(1565年成立、源氏古注)』・『万水一露(1575年成立、源氏古注)』・『十訓抄(1252年成立)』・『二中歴(1198年頃成立、百科事典)』

[寛連の囲碁逸話]

『今昔物語集（1120年頃成立、巻24の6「碁擲の寛蓮、碁擲の女事」）』・『古事談（1212～1215年成立）』・『古今著聞集（1254年成立）』・『山城名勝志（1705年成立）』・『本朝語園（1706年成立）』・『広益俗説弁（1715年成立）』・『桑華蒙求（江戸時代成立）』・『枯杭集（1668年成立）』・『筆のすさび（1806年成立）』・『篠舎漫筆（1849年成立）』・『松亭漫筆（1850年成立）』・『類題鮫玉集（江戸期和歌集）』・『松嶋眺望集（1682年成立、俳諧集）』

○ [長如来・天王寺冠者・賀陽・祐挙・高行・実定・教覚・道範・十五小 [少] 院・長範（平安末期～鎌倉時代の囲碁の上手）]

『二中歴（1198年頃成立の百科事典）』・『散木奇歌集（1125年頃成立）』・『囲碁事蹟部類鈔（江戸天保期成立）』

（近代の資料）

『日本囲碁史綱（関節蔵が明治42年から『囲碁世界』に連載論考）』

（稿者注記...『二中歴』に、「碁聖・寛蓮」のほか囲碁の上手として上記10人の名をあげる。

（以下、関節蔵『細注日本囲碁史綱』の考証を参考に記す）

「是は平安朝の半ばから鎌倉の末にかけての碁家と見えるが、果して何時代の人で何んな事蹟を有って居るのか、...僅に賀陽宣政は一条天皇の長保二年（一〇〇〇年）正月権少外記に任ぜられ...同年十一月直講を兼ね、翌三年七月歿した人である事、及び平祐挙は光孝天皇の流忠望王の後裔越前守保衡の子で、従四位下駿河守に叙任した人である事が、前者は外記補任に拠って、後者は尊卑分脉脱漏系図に拠って知られたのみに過ぎぬ。...只道範阿闍梨は後鳥羽天皇の御帰依浅からざる人で、又天王寺冠者は囲碁口伝に其説が収められてある広足である事は、同記の分註で分って居る。...」

(8) [正倉院宝物の碁器]

（「5、碁石の産地」で碁石にふれたが、古代の碁器といえば、正倉院宝物のそれを誰もが思い浮かべるのではないか。最近では「木画紫壇碁局」のX線写真も駆使して、その古代工芸の見事な技が分析されているが（宮内庁サイト） 囲碁史からの検討も併せて進めていきたいものである。たとえば、「木画紫壇碁局」の路線は17とも19とも見えるが、果たしてどちらな

のか。「16、ルール」とも絡むところである)

『東大寺要録(756年成立)』(「双六具・琴・琵琶・簫・呉竹笙」といった記載はあるが碁器のことは欠く)

『東大寺献物帳(756年成立)』(盤「木画紫檀」の一面、碁石「白碁子十四、黒碁子十五」、碁笥「銀平脱合子四合[各納碁子])

『延暦十二年曝凉帳(793年の虫干記録)』(盤と碁笥は前同。碁石の数「六百枚」)

『弘仁二年官物勘録(811年の宝物点検記録)』(盤と碁笥は前同。六百個の碁石について「紺牙撥楼一百六十、紅撥楼一百六十、黒一百四十、白一百三十五、欠五」の注記あり)

『雑物出入帳[從弘仁至天長](814年~826年の正倉院宝物出納記)』(「銀平脱合子四合並碁子六百/右漆御厨子に納む」)

『本朝世紀(1142年、外記日記)』(「宝物之中、聖武天皇玉冠及鞍御被枕碁局」)

『東大寺勅封蔵目録記上[建久以後等](1193年開封時宝物記録)』(碁笥が計一四と増え、碁盤は「紫檀囲碁枰」の一面に加えて外に三面)

『東大寺統要録(1193年開検時の記録)』(北蔵「囲碁一笥[白黒]...囲碁石六笥[白黒]...紫檀囲碁枰一枚、中蔵「囲碁枰一枚...切目囲碁枰一脚...囲碁枰一脚[在錦覆蓋]」)

『満濟准后日記(1429年、足利將軍家護持僧の見聞記録)』(碁石三子(黒二、赤一)と沈香二切を義教が持ち帰った様子)

『天正二年截香記(1574年東大持記録)』(信長の蘭奢待截取の始末記。碁盤を一時持ち出してあとで返した、と読めるが、碁石も一緒に持ち出したものか)

『東大寺正倉院開封記(1693年開封記録)』(「碁盤三面[指渡一尺六寸三分四方、高四寸二分、但寸法は三面共同事也]、一面二家あり、赤石百三十三、悉く唐絵あり、黒石百二十、何も碁ケ共に...」とある)

『倭訓栞(文化~文久年間成立)』(「中編八、古」「後編十」に記事あり)

『嬉遊笑覧(1830年成立)』(巻二下「器用」に記事あり)

『甲子夜話(1841年成立)』(三篇・巻二八に天保4年の開封記録)

『東大寺正倉院宝物図(「古事類苑」載)』(碁盤図も併載)

『正倉院文書事項索引(吉川弘文館・東京大学史料編纂所編『大日本古文書』の物名語の索引)』

(「遊具類」に「木画紫檀碁局...碁子(紅牙撥碁子百參拾貳枚、紺牙撥鏤碁子百貳拾枚)」等。

注記も参照)

(9) [漢詩の囲碁]

○ [漢詩に初出の爛柯]

『経国集(827年成立、淳和天皇勅撰、良岑安世編、「爛柯」初出の漢詩が載る)』

(以下、囲碁を詠む平安期の漢詩集をあげる)

○ 『懐風藻(751年成立)』(前掲、弁正の逸話を載せるが囲碁の漢詩はない)

○ 『菅家文草(菅原道真=845~903年の家集)』(囲碁を読む漢詩6首)

○ 『新撰万葉集(893年、道真撰の和歌集)』(囲碁漢詩1首)

(稿者注...菅原道真は囲碁を正面から詠んだ最初の文人)

○ 『扶桑集(998年成立)』(清仲山の爛柯詩1首)

○ 『本朝麗草(1010年頃成立)』(儀同三司=内大臣・藤原伊周の囲碁詩1首)

○ 『江吏部集(大江匡衡=1012年没の家集)』(囲碁漢詩2首)

○ 『賦光源氏物語詩(1290年成立)』(「源語」の漢詩3首)

○ 『本朝続文粹(藤原敦光の詩集)』(敦光は1144年82歳で没。平安後期の代表的な文人で、その死によって「平安の漢詩の幕は閉じられた」と評されたという)

『本朝無題詩(1162年頃成立、藤原茂明の詩集)』

(10) [宮中及び貴族の囲碁話を記す資料]

(古代に囲碁を楽しむ階層は、天皇を中心とする宮廷貴族と僧侶に限られていた、として良いだろう。「僧侶の碁話、逸話」については、先の「目次・3」にまとめて載せた。ここでは、後者の「天皇や宮廷貴族」の囲碁を記す資料をまとめた)

『続日本後紀』(833年3月15日の条)(「天皇(仁明天皇)紫宸殿に御し、群臣に酒を賜ふ。囲碁の興あり。訖りて親王以下に御衣を賜ふに各々差あり」)

同書(834年7月11日の条)(稿者注...上宮中年中行事「旬」の碁会。「親王大臣には御衣、次いで侍従已上には禄を賜ふ」とする。この日は庚申と重なった。庚申待で夜を徹するのは道教による習慣で、饗宴と楽や詩歌の会などが催された。また、徹夜は囲碁にも向き庚申の碁

の記録は多い)

同書(836年3月11日の条)(禁裏旬の宴、仁明天皇が紫宸殿で侍臣を饗応、琵琶を弾かせ、碁を打たせる「大臣に御衣を賜ふ」とする)

同書(836年6月20日の条)(これも紫宸殿での饗宴、天皇が殿上人たちに碁を打たせる。この日は炎熱で靴を脱ぎ、侍臣にもくつろがせる。相撲の司の鼓も奏された)

同書(839年10月1日の条)(伴宿禰雄堅魚と伴宿禰須賀雄の御前対局の記事。仁明天皇は紫宸殿で群臣を饗応、伴宿禰雄堅魚と伴宿禰須賀雄を召して囲碁をさせる。賭物に新銭廿貫文が供され、一局に四貫文賭け五局打。雄堅魚が二子の碁で、須賀雄の4敗1勝。遣唐使の准判官・藤原貞敏に琵琶を弾かせ、群臣は酒に酔い禄を賜る)

(上の4記事は、史書の記す囲碁好き仁明天皇(在位833~850年)の宮中の碁話。この記事は、100年あまり後の故実書『西宮記』にも、「旬の行事」として引かれており、また近世の本居宣長の随筆にも載る。それらをつづいて挙げる)

『西宮記(恒例第三、十月、旬事、裏書)』(839年10月1日、844年10月1日の条 = 「...例に依り朝座に着す可し。...(政ごとの後)主上南方に御す。皇太子参上す。公卿参入し、殿上に侍る。旬の酒恒の如し。...前美乃介伴雄堅魚・唐使碁(碁)師伴菅雄二人、殿上に召し、銭三百貫を賭け碁を囲む。...魚方勝籌四、雄方勝籌一と云々」)

『菴庵随筆』(1177年頃、本居宣長著)「...美濃介伴雄堅魚と云人と、遣唐使碁師伴菅雄と云人とを、殿上に召て、銭三百貫を賭にして、碁をうたせさせ玉ひし事見えたり、遣唐使に碁上手を添て、遣はされしと見ゆ、...」

(稿者注...上手として召しだされた一人、伴宿禰雄堅魚とあるのは、「前の美濃介」という官職から、先の〈目次7「古代の上手」〉に記した延暦の遣唐使団の「碁師」伴宿禰少勝雄と同一人。対局相手の伴須賀雄は同族の縁者だろう。『西宮記』では、伴須賀雄の方を遣唐使碁師とする。2年前837年に入唐した藤原常嗣大使が、この年の9月に帰国している。この日の宴で琵琶を弾いた藤原貞敏はその遣唐使の准判官で、須賀雄も使員の一人だった。〈肥前松浦に帰船の記録があり、須賀雄の名も見える〉この日の旬の宴は、慰勞を兼ね帰国した遣唐使を招いたのであろう。伴雄堅魚と須賀雄の二人はともに生没年不明、この年の年齢もはっきりしない。ただ、雄堅魚は40年前の遣唐使「碁使」だから、須賀雄とは親子ほど違う年配者。同姓の雄堅魚と須賀雄が親子だとしたら、二代にわたって「碁師」遣唐使として派遣されたことになる。手合は、老人の雄堅魚が若者の須賀雄に二子とする。この記事は、江戸の随筆『前々太平記』(1715年成立)・『塩尻』(1733年頃成立)・『翁草』(1791年成立)

にも関連記事が見える)

『西宮記 ([恒例第三、十月、旬事、裏書]「還宮後儀」)』(844年10月1日の条 = 「...主上南殿に御す。皇太子入見す。諸衛番奏すること常の如し。王卿は殿上に侍す、散位従五位下伴宿禰雄堅魚・備後掾伴須賀雄を召し、御座前に於て、囲碁をせしむ。[雄堅魚及須賀雄碁子二取。]賭物は、承和錢二十貫文。一局に賭る処也と云々」)

(稿者注...上につづく伴宿禰雄堅魚と伴須賀雄の御前試合の記録。二人の手合割は雄堅魚の二石で、前の記事と変らない。こちら賭金は20貫文で「一局に賭ける所也」と、前回の五局に対して一番勝負とするが、結果は記していない。ここで、史書にはじめてみえる「二子の置碁」の事について小考する。中国では近代まで「事前置石制」(互先の対局で、四隅の星に黑白各二子をタスキに配して開局する)だったとする。この「事前置石制」の場合に置碁はどのように石を置くのか、明の時代の古棋譜をみると、二子局では現在と同様に黒石を対角線に二子置いて白から開局している譜がある。三子局はさらに天元に黒石を置き開局している。この二子局は「事前置石制」とのかかわりでいうと、「白の事前置石を二子ともに取り去った」状態ということにもなる。すなわち、置碁はハンデの石を「置くのではなく、上手の事前置石を取り除く」という感覚となる。この天覧の二子の置碁で、前の『続日本後紀』には「石を二路に下す」とあり、この『西宮記』では「碁子二取」と表現する。この、「碁子二取」の表現には、「事前置石」の「白石二子を取り去る」ことに通うところがあるうか)

『日本三代実録』(874年8月21日の条 = 「...公卿、侍從局に於て宴会を設く、...後院に詔じ新錢十貫を賜ひ、手談の賭物に充てしむ」(『西宮記』卷十の裏書に同文あり、略)

(稿者考...公卿が侍從局で宴会を主催、院から、新錢十貫が手談の賭物として供された。天皇の臨席しない公卿たちの私宴の様子。時の天皇は囲碁好き・仁明帝の孫の清和天皇)

『日本三代実録』(880年6月7日の条)(大宰府大式に赴任する安部貞行の送別の碁会。貞行が赴任の挨拶に参内し、御衣が下賜されて退出。親王・公卿たちがきざはしに待機して、貞行を留めて宴を張り碁会を催した。賭物に内蔵から錢一万(十貫)が供された。「碁の賭物」が「碁手の錢」といわれて祝儀の意味で使われ出すのも、この時代から。なお、光圀編の『大日本史』にも「列伝・阿倍貞行」で、右『三代実録』の囲碁送別の条を引いている)

『西宮記』(891年8月11日の条)(年中行事・定考の囲碁記事。定考は上皇との通音をさけて

日本古代の囲碁史に関わる文献資料リスト

コウジョウと訓む、六位以下の官人の勤務評定と加階昇任を行う儀式。酒宴も付き物、この年は囲碁の席も用意され達者な者が召された。勝者の褒賞に高坏に盛った銭〈碁手銭〉を備える)

『西宮記』(904年9月24日の条)(醍醐天皇が藤原清貫と法師寛蓮を召し、賭物を供して碁を打たせて上覧した記事。なお、『西宮記』著者の源高明は醍醐天皇の皇子の一人。960年代の成立とされ、碁聖・寛蓮の名が見える最も古い記録。寛蓮の相手の藤原清貫は、宇多法皇の信任厚かった参議保則の四男で母は在原業平の女。晩年に『延喜式』を編纂した智才の人物)

『扶桑略記』『西宮記』(907年1月3日の条)(醍醐天皇が仁和寺に行幸し宇多法皇に拝。法皇は敦実親王と左大臣に「天皇をもてなすため、碁を打ちなさい、よい賭物の馬がある」と命じた。醍醐天皇の仁和寺への朝覲行幸は毎年恒例の行事だったが、囲碁の記事はこの年と後の926年の2回。左大臣・藤原時平の相手をした敦実親王は醍醐天皇の異母弟で、このとき14歳、元服前の少年だった)

『扶桑略記』(909年6月19日の条)(鴨川の洪水の跡を公家たちが視察、公卿たちは幄座を設け、厨家を煩わせて酒を飲み囲碁を楽しむ。その碁手銭も厨家の負担)

『西宮記』(918年8月20日の条)(庚申侍の御遊、酒宴に和歌・管絃の興が催され、碁手銭が供される。賭碁が打たれたという語句はないが、各房で勝負事の遊戯が行われたと想像する)

『貞信公記』(923年7月24日の条)(皇子誕生七夜産養に碁手銭を供す。皇子(寛明親王、後の朱雀天皇)が誕生、内裏で宇多院主催の七夜の産養があり、碁手銭が供される)

『西宮記』『吏部王記』『政事要略』(925年11月14日の条)(11月の宮中新嘗祭、「小忌侍従等に囲碁をせしめ賭物を盛り居ふ」と『西宮記』にある。新嘗祭は暁天にいたるまでの儀式で、時間つぶしに囲碁は適している)

『貞信公記』(926年5月22日の条)(左大臣・忠平の碁会、翌日に負業〈敗者が勝者を饗応〉)

『西宮記』(926年11月15日の条)(宮中新嘗祭の囲碁、賭物は銭ではなく牛馬が供された)

『扶桑略記』(927年2月14日の条)(「...六条院に行幸す。...此日、王侯を召さず。碁を囲み日を送る」と、醍醐天皇が宇多院に行幸し、囲碁を楽しむ。醍醐天皇の相手が誰だったか、父子で烏鶯を競ったか、或は法皇に近侍する寛蓮を相手にしたのかも知れない。醍醐天皇が寛蓮と金の枕を賭物にして碁を打った、という逸話が『今昔物語集』にある)

『吏部王記』(928年11月21日の条)(これも新嘗祭の儀式当日の囲碁の記録)

- 『西宮記』(929年12月11日の条)(神今食祭〈月次祭ともいい、6月と12月に行う宮中年中行事〉の考証。「暁膳の間、或は囲碁有り」と暁に新米を食して祝うが、その膳を待つ間の碁会)
- 『大和物語』(951年頃成立)(敦慶親王〈930年没〉と歌人・藤原定方との囲碁逸話が載る)
- 『西宮記』(931年8月11日の条)(891年にもあった年中行事・定考での囲碁。この年は諒闇で派手な饗宴はなく、囲碁・絃歌の催しがあったとする)
- 『吏部王記』(934年12月11日の条)(12月の月次祭の碁会、傍らに賭銭を据える)
- 『西宮記』『吏部王記』(934年12月27日の条)(故醍醐天皇の皇子〈源充明〉元服招宴での碁会。この記事は『大和物語(951年頃成立)』にも引かれている)
- 『九曆』(935年9月7日の条)(年中行事・駒牽〈諸国から朝廷に献上される駿馬を披露〉での囲碁。記事は信濃の駒牽である。禁裏の庭を牽き回す間に、公家たちの囲碁も催される)
- 『吏部王記』(935年12月11日の条)(前年につづく月次祭での囲碁)
- 『吏部王記』(936年9月5日の条)(前年につづく信濃駒牽での囲碁の興行。碁手銭も供されたが、この日の賭物には駒牽の馬も下賜された)
- 『九曆』(937年1月11日の条)(右大臣仲平が主催した正月大饗応の碁会、碁手銭が供され、余興に主人も碁を楽しんでいる。この記事は『古今著聞集(1254年成立)』にも載る)
- 『九曆』(937年8月15日の条)(三年続きの信濃駒牽の碁会。公事・年中行事は前例を習い、習慣となって定着する)
- 『吏部王記』(937年12月11日の条)(月次祭の碁)
- 『西宮記』(938年6月14日の条)(月次祭の碁。囲碁が例年の習慣となっている)
- 『本朝世紀』(938年8月27日の条)(禁裏殿上の饗で碁手銭を供しての手談があったとする)
- 『本朝世紀』(939年5月27日の条)(鴨川の巡検に出向いた諸卿が幄を立て饗饌を設けて碁を囲むというもの。先の909年にも、洪水で崩れた鴨川を視察団の囲碁記事があった)
- 『九曆』(944年9月14日の条)(駒牽での囲碁。四献の後、親王と中納言源清蔭が囲碁の興)
- 『栄花物語』(1093年頃成立)(村上天皇〈946年即位〉、後宮の囲碁記事を載せる)
- 『拾遺和歌集』(1005年成立)(村上天皇と藤原伊尹との賭碁記事を載せる。同記事は『古事談』『好古日録』『見聞雑志』にも載る)
- 『西宮記』(947年8月、定考の条)(恒例の定考での囲碁記事。この年には裏銭、いわゆる碁手銭を停止したとする。この年は都に疱瘡が流行し、11月には「諸祭使の饗禄の禁止、衣服の奢侈の禁止」と儉約令が出されている。この記事は故実書『江家次第』にも載る)

日本古代の囲碁史に関わる文献資料リスト

- 『西宮記』(948年2月列見の条)(列見〈2月11日の公事で、六位以上の芸能に秀でた者を召し、その器量・容儀を見定めるもの〉での碁会と碁手銭停止の記事)
- 『吏部王記』(949年7月22日の条)(恒例の月次、神今祭の碁会。この年は穢れで一月余ずれて催。「暁を待つ間の徒然により碁局を召す」とあり、夜を徹するのに囲碁は適している)
- 『西宮記』(956年2月13日の条)(列見の儀の囲碁記事)
- 『西宮記』(956年8月13日の条)(定考の儀式の碁記事)
- 『政事要略』(962年8月13日の条)(駒牽の囲碁)
- 『親信卿記』(973年6月16日の条)(円融院、碁の負業の記事)
- 『小右記』(982年6月5日の条)(弓場の碁会記事)
- 『陽明文庫記録』(983年2月28日の条)(列見の碁会記事)
- 『権記』(藤原行成の日記、1002年8月13日の条)(道長の囲碁と負業の記事)
- 『権記』(1003年6月20日の条)(禁裏馬場納涼の囲碁記事)
- 『御堂閑白記』(別称『御堂御記』『道長公記』1006年8月19日の条)(遷第の碁手銭の記事)
- 『御堂閑白記』(1012年9月10日の条)(道長が禁裏に碁盤献上する記事)
- 『小右記』(1024年6月5日の条)(囲碁で抜刀のケンカの記事)
- 『左経記』(1025年12月12日の条)(庚申の囲碁と碁手銭)
- 『北山抄』(1025年頃成立、藤原公任著の故実書)(禁裏月次祭の囲碁の考証)
- 『小右記』(1030年4月20日の条)(年中行事の囲碁記事)
- 『中右記』(1094年12月11日の条)(月次祭に囲碁絶えるとする)
- 『為房卿記』(1104年2月16日の条)(庚申の碁会記事)
- 『長秋記』(1111年12月4日の条)(髪そぎ儀式で幼児を碁盤の上に立たせる)
- 『永昌記』(1129年7月26日の条)(殿上の碁盤・弾碁盤のこと)
- 『長秋記』(1131年4月8日の条)(法会の布施を碁盤の上に置くこと)
- 『長秋記』(1134年12月4日の条)(髪そぎ儀式の碁盤)
- 『台記』(藤原頼長の日記1144年8月4日の条)(植竹下での碁会の記事)
- 『台記』(1145年2月11日の条)(列見の囲碁=久しく途絶えていた行事の復活の記事。この記事は、めずらしい記録ということで、以下の書にも引かれている。『本朝世紀(1159年頃、藤原通憲選)』『古今著聞集(1254年、橘成季編)』『百鍊抄(1300年頃成立)』)
- 『台記』(1145年6月15日、6月25日の条)(藤原頼長の午前対局、勝って褒賞に馬を受ける)

(11) [辞書・故実書・史書に見える古代の碁]

(「囲碁」は現存最古の辞書『和(倭)名類聚抄(931年頃成立)』に項立てされており、知識として常識化していたことが知れる。また、故実書に現れる「囲碁」は、宮中、貴族社会の儀礼的常識ということになるだろう。史書・史談での「囲碁」の登場は、そうした常識化あつてのものという気がするが、このように、言及文献の性格をふまえることも、今後の研究には必要になってくるのかもしれない)

『和(倭)名類聚抄(931年頃成立)』(現存最古。起源説は『博物志』の堯・舜説を引く)

『箋注倭名類聚抄(1821年成立)』(前書の各種写本を校注。囲碁の項についても補足がある)

『北山抄(1025年頃成立)』(殿上の碁盤の考証)

『大日本史(1697年成立)』(留学僧・弁正、長屋王の変、紀夏井、寛蓮などの記事)

『江家次第(1100年頃成立、大江匡房撰の故実書)』(古代の貴族の囲碁で場を提供する者は碁手銭を供したこと、碁手銭は974年に一時停止された事、法会の布施を碁盤の上に置くことなどを記す)

『江談抄(1100年頃成立、大江匡房の談録)』(大江匡房の談録。吉備真備囲碁伝承説の嚆矢)

『東宮年中行事(1100年頃成立)』(清涼殿々上の間〈殿上人控えの間〉には碁盤が置かれていること)

『禁秘抄(1213年頃成立)』(殿上の間の碁盤記事)

『禁秘抄考註(1215年頃成立)』(囲碁の起源、台番所に弾碁盤のこと)

『禁腋秘抄(室町初期成立、故実書)』(清涼殿々上の間の碁盤の記事)

『大内裏抄(1520年頃成立、故実書)』(殿上の碁盤の記事)

『日中行事略解(1820年成立、故実書)』(殿上の碁盤の記事)

『大内裏図考証(1800年頃成立、故実書)』(殿上の碁盤の記事)

(12) [和歌の囲碁]

(以下、囲碁の歌のある平安期までの歌集)

『東大寺諷誦文稿(796年頃成立、斧の柄の記事)』・『古今和歌集(905年成立、斧の柄の歌)』・『兼輔集(933年没)』・『伊勢集(938年頃)』・『源順集(983年没の家集、碁盤歌な

日本古代の囲碁史に関わる文献資料リスト

どの記事』・『いほぬし(庵主)(950頃成立)』・『後撰和歌集(951年成立、村上天皇勅編集、碁笥の蓋に斧の柄の和歌)』・『元輔集(957年没の家集、斧の柄の歌)』・『九条右大臣集(960年没の家集、斧の柄の歌)』・『海人手古良集(師氏=970年没の家集)』・『一条摂政御集(伊尹=972年没の家集)』・『古今和歌六帖(976年頃編)』・『安法法師集(家集、「碁盤を枕」の歌)』・『実方集(実方=998年没の家集)』・『拾遺和歌集(1005年成立、「藤原実頼の和歌と碁」 「円融院の乱碁と勝業負業」のこと。同記事は『新千載和歌集』『新勅撰和歌集』『万代和歌集』にも載る)』・『和泉式部歌集(1027年頃)』・『堀河院百首和歌(1105年頃成立)』・『江帥集(大江匡房=1111年没の家集)』・『金葉和歌集(1127年成立)』・『行尊大僧正集(行尊=1135年没の家集)』・『為忠家後度百首(1135年頃成立、頼政の囲碁題詠歌9諸首載)』・『称名院追善千句(1563年成立)』・『囲碁事蹟考(江戸後期成立)』・『拾遺和歌集』・『円融院扇合』・『源順集』・『新続古今和歌集』・『続千載和歌集』・『新勅撰和歌集』(各書1234年成立)・『万代和歌集(1248年成立)』・『安法法師集』・『雅筵醉狂集』(『源氏物語』狂歌)・『大団(『源氏物語』狂歌)』
(近世の「狂歌集」の中にも上代の囲碁を詠むものは多い、それらは『囲碁語園』を見られたい)

(13) 【歌謡・連歌・俳諧・雑俳】

『和漢朗詠集』・『拾遺和歌集』・『新千載和歌集』・『枯杭集』・『享徳千句(1453年成立、「源語」の連歌)』・『大山祇神社法楽連歌(「源語」の連歌)』・『貞徳俳諧記(「源語」の俳諧)』(以下省略。上の他、歌謡・連歌・俳諧・雑俳書に囲碁の資料は多数ある。それらは『囲碁語園』を見られたい)

(14) 【物語 その他】

○【清少納言・枕草子】

『枕草子(999年頃成立、碁話9ヵ所)』 『古本説話集(1150年頃成立、大齋院サロンの碁話)』

○【因幡堂の碁盤(1003年頃)】

『京童(1658年成立)』 ・『洛陽名所集(1658年成立)』 ・『京雀(1665年成立)』 ・『扶桑

京華志（1665年成立）・『出来齋京土産（1677年成立）』・『京師巡覽集（1679年成立）』・
『雍州府志（1684年成立）』・『山城名所寺社物語（1757年成立）』・『開帳花くらべ（1773
年成立）』・『花洛羽津根（1863年成立）』・ほか俳諧・雑俳に有り

○ [平安の諺]

『世俗諺文（1007年成立）』

○ [源氏物語の囲碁]

『源氏物語（11世紀初期成立）』（囲碁記事の巻 = 「桐壺（後世の源氏絵に元服の碁盤）、
「空蝉」「葵」「須磨」「絵合」「松風」「胡蝶」「竹河」「橋姫」「椎がもと」「宿
木」「東屋」「手習」の各巻）

（関連書）

[古注書] = 『源氏釈（1170年頃成立）』『源氏綱目（1660年成立）』・『源氏物語提要
（1432年成立）』・『河海抄（1365年成立）』・『類字源語抄（1431年成立）』・『源氏和秘
抄（1449年成立）』・『花鳥余情（1472年成立）』・『細流抄（1511年成立）』・『源氏外伝
（1673年成立）』・『休聞抄（1550年成立）』・『明星抄（1550年頃成立）』・『紹巴抄
（1565年成立）』・『孟津抄（1575年成立）』・『万水一露（1575年成立）』・『珉江入楚
（1598年成立）』・『続源語類字抄（1639年成立）』・『玉の小櫛補遺（1820年成立）』ほ
か

[随筆] = 『塩尻』『嬉遊笑覧』『近世風俗志』『爛柯堂棋話』ほか

[漢詩集] = 『賦光源氏物語詩』

[狂歌集] = 『大団』ほか多数

[連歌・俳諧書] = 『大山祇神社法楽連歌』『貞徳俳諧記』『西鶴大矢数』ほか多数

[歌謡集] = 『宴曲抄』

[能・謡曲書] = 『禅鳳雑設』『濟生堂五部雑録』『碁』（観世流曲）ほか

○ [紫式部（1007年頃）]

『紫式部日記（1008年）』

○ [後三年の役、引き金となった碁話（1083年）]

『奥州後三年記（1347年成立）』・『前太平記（1690年頃成立）』・『康富記（外記局官人・中
原康富の日記）』・『大日本史（1697年成立）』・『春波楼筆記（1811年、司馬江漢著）』

○ [源義家の碁話（1106年頃）]

『古今著聞集（1254年成立）』・『前太平記（1690年頃成立）』・『古事談（1215年頃成立）』・

日本古代の囲碁史に関わる文献資料リスト

- 『十訓抄（1252年成立）』・『源威集（1387年頃成立）』・『本朝語園（1706年成立）』・『諸士男子訓（1719年成立）』
- [互先は「かたみせん」（1110年頃）]
- 『今鏡（1170年頃成立）』・『玉勝間（1812年成立）』・『孝経楼漫筆（1810年頃成立）』
- [内裏、女房の碁（1130年頃）]
- 『今鏡（1170年頃成立、女房の乱碁）』・『夜半の寢覚（11世紀後半成立）』・『狭衣物語（1070年頃成立）』
- [平等寺因幡堂の碁盤伝説（1003年に碁盤飛来伝説）]
- 『京童（1658年成立、名所記）』・『洛陽名所集（1685年成立、名所記）』・『京雀（1666年成立、名所記）』・『扶桑京華志（1665年成立、名所記）』・『出来齋京土産（1677年成立、名所記）』・『京師巡覧集（1679年成立、名所記）』・『雍州府志（1684年成立）』・『山城名所寺社物語（1757年成立、草子）』・『開帳花くらべ（1777年成立、草子）』・『花洛羽津根（1863年成立、草子）』
- （他俳諧、雑俳に句多数）
- [平安の諺]
- 『世俗諺文（1007年成立、「堯子不堯」「七世の孫」「商山四皓」）』
- [往来物の碁話]
- 『新猿楽記（1060年頃成立）』・『雲州消息（1060年頃成立）』・『貴嶺問答（平安末期成立）』
- [その他]
- 『九条右丞相遺誠（960年）』・『三宝絵（984成立、「囲碁は日を送る戯」）』・『宇津保物語（987年頃成立、囲碁話20以上）』・『栄花物語（1030年頃成立）（村上天皇〈946年即位〉後宮の囲碁記事、982年宮中女御の囲碁記事、1014年碁敵・頼通と隆家の碁話、東宮の碁話）』・『今昔物語集（1120年頃成立）』・『今鏡（1170年頃成立）』・『夜半の寢覚（11世紀後半成立）』・『新猿楽記（11世紀後半成立）』・『雲州消息（1066年頃成立）』・『貴嶺問答（平安末期成立）』・『狭衣物語（1070年頃成立）』・『奥州後三年記（1347年成立）』・『前太平記（1690年頃成立）』・『春波楼筆記（1811年成立）』・『とりかへばや物語（1150年頃成立）』・『前太平記（941年の藤原純友討伐、陣中囲碁の記事）』
- [爛柯伝説の中国書]
- 『水経注』・『述異記』

(15) 【**囲碁の賭物・碁手銭・儀式の碁盤**】

（平安期には、禁裏や貴族の間で「祝い事での碁会」が決まりの行事のようになる。その碁会で、勝者に与える褒賞を「碁手銭」といい、「場を提供する主人が用意するもの」とされた。

以下、平安期の「賭碁」「碁手銭」「儀式の碁盤」を載せる資料を挙げる）

- [遊宴の碁会（833年）] 『続日本後紀』（天皇紫宸殿に御し、親王以下に御衣を賜ふ）
- [庚申・旬の宴の碁会（834年）] 『続日本後紀』（御衣・禄を賜う）
- [宮廷、旬の宴（836年）] 『続日本後紀』（大臣に御衣を賜ふ）
- [伴須賀雄と雄堅魚の天覧の勝負碁（839年）] 『続日本後紀』『西宮記』（賭物に新銭廿貫文が供され、一局に四貫文賭けて五局打たれた）
- [再度の伴須賀雄と雄堅魚の天覧の勝負碁（844年）] 『西宮記』（承和銭20貫文を一局に賭る）
- [手談の賭物（874年）] 『日本三代実録』（「新銭十貫を賜ひ、手談の賭物に充てしむ」）
- [送別の碁会（880年）] 『日本三代実録』（大宰府大式となった安部貞行の送別の碁会、「親王公卿杖下に参侍し、内蔵の銭一万を以て囲碁賭物に充てる」）
- [定考の宴で囲碁（891年）] 『西宮記』（「定考の宴で囲碁」、達者な者が召され勝者の褒賞に高坏に盛った銭を備える）
- [大祓の儀（901年）] 『西宮記』（「饗を儲け紙を以て碁手と為すと云々」）
- [寛蓮の碁（904年）] 『西宮記』（醍醐天皇、「寛蓮を召し、右少弁清貴と碁を囲ましむ、唐綾四疋、法師勝つ、別に禄あり」）
- [天皇朝覲の碁会（907年）] 『扶桑略記』『西宮記』（「天皇朝覲、敦実親王と左大臣藤原時平の賭碁」賭物に馬）
- [鴨川視察で碁会（909年）] 『扶桑略記』（諸卿洪水跡の鴨川を視察「数盃の後囲碁の興あり。厨家、裏銭す」）
- [宮中宴遊の碁会（910年）] 『西宮記』（「侍臣に碁を囲ましむ。其の負者に酒を賜る」）
- [庚申の宴の碁手（918年）] 『西宮記』（内蔵寮酒肴を調へ碁手を進む。[十三貫。一貫御料、（九貫男房）三貫女房に入る] 亥時侍臣提賭物参上）
- [産養の碁手（923年）] 『貞信公記』（「内裏（醍醐天皇）・宇多院御養事有り、大内白褂・赤褂各十領、白絹廿疋、赤絹百疋、綿五百屯、調布五百端、碁手銭五十貫、院兒衣等四

日本古代の囲碁史に関わる文献資料リスト

- 、碁手六十貫、又御膳物・人給食各巨多、但内裏弁備台盤、公卿以下五位以上八十人許」)
- [新嘗祭に碁を囲む (925年)] 『西宮記』 (「駿河掾忌部を以て奉仕せしむ。大納言これを許す。小忌侍従等に囲碁をせしめ賭物を盛り居ふと云々」十一月の新嘗祭で真夜中、暁天にいたるまでの儀式)
 - [皇子誕生の産養 (926年)] 『吏部王記』 『外記』 『御産部類記』 『醍醐天皇御記』 『西宮記』 (裏銭五十貫)
 - [左大臣・忠平の碁会と負業 (926年)] 『貞信公記』 (藤原仲平・藤原元方等来り囲碁す。左大臣〈藤原忠平〉負物〈負業敗者が勝者を饗応する〉一瓶を出す)
 - [新嘗祭の囲碁、賭物に牛馬 (926年)] 『西宮記』 『政事要略』 (大蔵卿と元方碁を囲む、牛と馬を賭くと云々)
 - [産養の碁手 (926年)] ... 『吏部王記』 (「其夜有碁手銭及賜禄」)・『外記』 (「有裏銭五十貫」)・『御産部類記』・『醍醐天皇御記』・『西宮記』 (「碁手銭卅貫」)
 - [遷御に碁手を供す (930年)] 『西宮記』 (「穀倉院、饗・碁手等を設く」)
 - [宴遊に碁手 (932年)] 『西宮記』 (「内給所銭を召し、碁手料と為す」)
 - [月次祭に碁会 (934年)] 『吏部王記』 (12月の月次祭、囲碁の席をしつらえて源国淵と衆望に対局させ、傍らには器に盛った賭銭が据えられる)
 - [元服の招宴に囲碁 (934年)] 『吏部王記』 『西宮記』 (主客碁を囲む。是間、引入頭女装束を纏ひ、馬・鷹を贈る)
 - [駒牽の囲碁に碁手 (935年)] 『九曆』 (信濃の駒牽＝諸国から朝廷に献上される駿馬を披露する年中行事「本府酒肴を羞し、裏銭等を立つ。召使盛銭を分ち、王卿の傍に置く。碁の興有り」)
 - [駒牽の囲碁に碁手 (936年)] 『吏部王記』 (「右衛門府碁手銭十干(貫)を進む 囲碁一局、賭に今日賜はる所の駒を以てする」...前年につづく信濃駒牽での囲碁の興行。碁手銭も供されたが、この日の賭物には駒牽の馬も下賜された)
 - [右大臣正月大饗の碁会に碁手銭 (937年)] 『九曆』 (「中務卿と右大臣と囲碁の事ありけり、碁手は銭にてぞ有ける、昔はかやうのはれの儀にも、懸物にいでけるにこそ、近代にはたがひてこそ侍りけれ」...右大臣仲平が主催した正月の大饗)
 - [殿上の手談に碁手 (938年)] 『本朝世紀』 (「皇帝常寧殿より綾綺殿に遷御。今日内□(欠字)寮饗を儲く。裏銭卅貫文を進む」)

- [月次祭で囲碁 (938年)] 『西宮記』 (神今食の宴、少納言実利が故実の不慣れで酒席に「囲碁の賭銭を盛り据える」ことを怠り、左大臣の仲平から先例を引いて正される)
 - [村上天皇、後宮の囲碁 (946年)] 『栄花物語』 『拾遺和歌集』 (村上天皇と藤原伊尹とで帯を賭けて碁を打った)
 - [信濃駒牽での囲碁 (944年)] 『九曆』 (碁会の事を記すが、碁手・賭物の記事はない)
 - [定考の囲碁に裏銭の停止 (947年)] ... 『西宮記』 (碁を良くする者の碁会の記事につづき「天曆元年、宣旨停裏銭」と、947年に碁手の禁令があったとする。この年都に疱瘡が流行り11月に「諸祭祀の饗禄の禁止、衣服の奢侈の禁止」の儉約令が出されている。ただこの禁令は年中行事に限ったもののようで、「産養」や「皇子立太子祝」の碁手記事はこの後もつづく)
- (以下、「碁手禁令」の考証記事)
- 『政事要略』 (「上卿或は又弁・少納言の碁を能する之者を召す。左右各碁を囲む。...高坏一碁を以て裏銭を盛る。但し、裏銭、天曆元年より停止す」)
- 『江家次第』 (囲碁、公卿若しくは弁・少納言の中、碁を能くす輩を召し之を囲ましむ。厨家、裏銭をたてまつる。天曆元年、宣旨により銭を停む。...上首が黒を把りて、下臈が白を把る)
- [産養の碁手銭 (950年)] 『九曆』・『花鳥余情』 (「興方饗女房碁手廿六貫、饗男方碁手廿五貫」)
 - 『花鳥余情』 (「碁手の銭二万、贈り物には、児の衣と襦袢と各五重ね、...」)
 - [皇子立太子祝の碁手 (950年)] 『九曆』 (7月23日の条「本家設碁手廿貫、十貫殿上侍、十貫給四陣、[近衛各三貫、兵衛各二貫]」)(7月24日の条「各碁手銭有り。殿上女房・女官各十千(貫)、近衛各四千」)(8月5日の条「碁手五十貫、[十貫殿上、十貫碁所、五貫女官、十貫四陣、近衛各三具、兵衛各二具、十五貫本家女房、]」)(10月22日の条「碁手卅貫、勅使有年朝臣、禄物白大褂二領」)
 - [延暦寺等二十一箇寺諷誦に碁手 (950年)] 『西宮記』 (「廳別納儲饗、碁手卅貫、勅使有年朝臣、禄物白大褂二領」)
 - [行幸の碁手 (960年)] 『村上天皇御記』 (「天徳四年十一月四日、冷泉院に移ると云々。...内蔵酒肴・碁手等を、王卿侍臣等に於てこれを給ふと云々」)
 - [駒牽の囲碁 (962年)] 『政事要略』 (碁会の記事はあるが「碁手銭」の記事はない。年中行事の儉約令がつづくか?)

日本古代の囲碁史に関わる文献資料リスト

- [庚申に碁手(973年)] 『親信卿記』(「聊於女房有庚申事、依御忌月如密、但召仰内蔵寮、弁備突重十五前、兼令進碁手銭、[突重二居、銭五十貫、而司進六貫]...女房たちの庚申待の行事、忌月で公卿たちは参加せず内々の儀で行われた。それに内蔵寮から碁手銭が供された)
- [円融院の乱碁、勝態と負態(973年)]
『拾遺和歌集』『新千載和歌集』『親信卿記』『円融院扇合』『源順集』『新続古今和歌集』
(この年5月21日、天皇が一品宮の御所に出向いて乱碁をし、その負態が七夕の余興として行われ、「宮から奉られた扇につけた薄物に歌をおりつけた」とある)
- [関白兼通、転居に碁手銭(976年)] 『日本紀略』(「...副進碁手三万銭、即分給所々」...関白太政大臣の藤原兼通が桂芳坊に遷り、それに奉仕した内蔵寮に碁手を供する)
- [弓場で囲碁会と負業(982年)] 『小右記』(藤原実資の日記、武徳殿弓場で殿上侍臣たちの囲碁の会があり、四日後にその負態が催された)
- [碁手など饗禄の禁令(984年)] 『新抄格勅符抄』(「太政官符、雑事拾壹箇条」とし「応重禁制諸司・諸衛官人宴・碁手輩事...右、饗宴之制、明在天平宝字二年勅書・永観二年符、綸旨頻降、炳誠重置、...以前条事、下知如件、... 長保元年七月廿五日」とある。後の999年の太政官符の記録。この年984年に碁手など饗宴での禄の禁制が出されたとする。碁手停止のことは前にもあり、この後も度々儉約令として出される。なお、古く天平宝字2年(758)の勅書には、碁手の字句は見えない)
- [庚申宴遊に碁手(985年)] 『小右記』(「永観三年正月十五日、庚申、早朝退出、...已及通夜、...有御庚申事、於石灰壇有擲采之興、内蔵寮献碁手等、」...庚申の遊びの双六、前の年に禁制された碁手銭が供されている)
- [産養の碁手(985年)] ... 『小右記』(藤原実資の女児誕生にともなう五夜・七夜、産養の碁手の記録「廉平朝臣出碁手三十連」と記す)
[宇津保物語に語られる碁手(987年)] 『宇津保物語』(『宇津保物語』には碁手の描写が多くある)
- [道長の碁と負業(1002年)] 『権記』(藤原行成の日記。行成が囲碁の負物「葉子形の書翰籠に納めた斑竹筆卅管」を左府〈左大臣・藤原道長〉の所へ持参した)
- [納涼の賭碁(1003年)] 『権記』(禁裏北馬場に納涼の席をしつらえ、碁会あり賭物を給う)
- [道長、遷第に碁手(1006年)] 『新儀式』(藤原道長の日記。この年、道長は41歳、左大

- 臣。小南の第に移り廿一社に奉幣、舎人などに碁手を供した)
- [『源氏物語』の碁手(1007年)] ... 『源氏物語』(「竹河」の巻に、姫たちが庭の桜の花を賭物にする困碁の記事がある)
 - [後一条天皇誕生、産養に碁手紙(1008年)] 『不知記』([三夜事]「今夕宮庁諸御膳并饗衝重、屯食卅具、碁手等矣、(中略)次公卿以下有碁手事」、[五夜事]「今夜左府(道長)被儲御膳并威儀御膳、(中略)献和歌、(中略)次碁手帛、殿上人・諸太夫同有碁手、此間盃觴?勸、朗詠間発、給禄有差」)
 - [敦良親王、七夜の碁手(1009年)] ... 『小右記』([七夜の儀]「二献、(中略)其後打攤、内蔵寮進基平(碁手)以粉紙為殿上人碁手、内蔵寮給禄、」)
 - [内裏遷御に碁手(1011年)] 『小右記』(当年六月一条天皇から三條天皇に譲位。三條天皇藤原道長の東三条第より新造なった内裏へ遷幸した。宣陽殿の饗の記事「...相引諸卿先着宣陽殿、(中略)給衝重、一兩巡後召碁手、紙、先供御料、...」)
 - [内裏饗宴に碁手紙(1013年)] ... 『小右記』(「正月廿八日、...隆家卿於簾中行事、上達部已上饗饌、亦有碁手紙者、」)「正月廿九日、...有饗饌、入夜皇太后宮大夫参入、有碁手紙、公卿少数、不及打攤、...」)
 - [道長、遷第に碁手紙(1016年)] 『左経記』(一条院新造がなり里内裏の道長の上東門第から遷御、6月2日の条 = 「...從撰政殿有貢馬并御送物等、[馬十疋、琴、枇杷等也、]又公卿侍臣并諸陣所々女房女官等給禄、皆有差、...内蔵寮儲饗饌、給殿上女房、蔵人所等、又献碁手料紙、...」)
 - (6月3日の条 = 「先於皇太后宮御方、聊有盃飯事、次引被着殿上、内蔵寮儲饗饌等如昨日、...依例碁手紙、」)
 - (6月4日の条 = 「穀倉院儲饗饌所々如昨日、[又儲御前衝重等、碁手如昨日、]事畢公卿等退出、件碁手料紙、每夜五百帖、從官行事所度之云々、」)
 - [内裏饗宴に碁手紙(1018年)] 『左経記』(閏4月1日の条 = 「...晚景参内、上達部依召参御前、衝重并碁手等事皆如昨夜、夜及深更退出」)
 - [庚申の宴遊に碁手紙(1022年)] ... 『左経記』(8月23日の条 = 「[庚申、天晴、]寮用意御庚申事、[殿上饗、上達突衝重、碁手紙女房百、上達部百余、殿上人百余、御断廿帖、禄料疋絹、]...次御厨子所供御膳、又供東宮膳、[高杯四本、]数盃之後、召碁手、...集攤之後、有碁経哥事、...」)(文中の「碁経哥」は「連歌」の誤記か)
 - [庚申の宴遊に碁手紙(1025年)] 『左経記』(源経頼〈のち参議左大弁〉の日記。「庚申で役

日本古代の囲碁史に関わる文献資料リスト

- 所が宴を設営し、碁手紙が用意され碁も打たれた」とする)
- [庚申の宴遊に碁手紙 (1026年)] 『左経記』 (2月13日の条 = 「庚申、天晴、今朝御物忌也、依有御庚申事、夜部有召参入、...参御前、先別前後小弓、次御遊、次内蔵寮進碁手紙、[御料、侍従料也、]...)
 - [皇女誕生、産養に碁手紙 (1026年)] 『左経記』 (12月11日「三夜事」の条 = 「天晴、自関白殿有御産養事、...上達部以下并所々皆有碁手料紙、...」)
(12月13日「五夜」の条 = 「天陰、降雨、有宮庁御産養、(調進・饗のこと、略)已上皆有碁手料紙色紙云々、...」)
 - [皇子誕生、産養に碁手紙 (1034年)] 『左経記』 (後三条天皇誕生五夜事の条 = 「7月22日、己酉、天晴、入夜参一品宮、自関白殿依有御産養事、殿以下上達部多被参入云々、...頃之召菅円座、令敷御簾前、納言以上着之後、奉碁手紙集攤、了賜禄、...」)
 - [内親王家歌合、判詞の碁手紙 (1050年)] 『祐子内親王家歌合』 (6月5日開催の歌合せて「...着本座後、置碁手料紙、」と碁手紙を記す)
 - [故実書の碁手 (1070年)] 『侍中群要 (1070年成立の故実書)』 (「巻8・御庚申」に「内蔵寮進碁手料錢十二貫、...」と記す)
 - [白川上皇、遷御に碁手紙 (1087年)] 『伏見宮御記録』 (「二月五日、戊子、天晴、今夜太上天皇自三条殿、初遷御新造鳥羽殿、...碁手紙無攤事、又女房衝重、蔵人所、武者所庁各有饗饌、碁手等供奉、...」)
 - [皇子誕生産養の碁手紙 (1119年)] 『源礼委記』 (産養3夜儀事の条 = 「御装束、(中略)四五献、次朗詠、次置碁手紙、[上達部料土高坏、殿上人料折敷、]...次第置集攤紙、[各一帖]次有擲筭之戲、」)
(産養5夜の条 = 「...次五献、[大夫宗通卿、蔵人、侍従季成取瓶子、]次置碁手之紙、...次殿上人・上達部各自下臈置紙、次擲筭、」)
(7夜の条 = 「...次三献、[右兵衛督実行、瓶子殿上五位]次置碁手之紙、有擲筭之戲、...」)
 - [皇子誕生産養 (1124年)] 『為隆卿記』 (鳥羽院の第二皇子、産養3夜儀事の条 = 「次召人令撤座上饗五六前、次献碁手帟 [公卿居高坏、加白薄様]」)
 - [上皇遷御の碁手紙 (1126年)] 『永昌記』 (師実東三条殿より高陽殿に移る条 = 「...今日太上天皇移徙東殿、(中略)初献、[敦兼朝臣持参御蓋之台巡行、同朝臣取瓶子、]二献、[左京大経忠卿勸盃、殿上人瓶子、]三献、[新中納言勸之、瓶子同、]次五位置碁手紙、[土高坏上

紙薄様如例、] …)」

- [「列見」「新嘗祭」碁手の考証 (1100年)] 『江家次第 (1100年頃成立、故実書)』 (「列見」の条 = 「囲碁。公卿若しくは弁 (弁官) ・少納言の能碁の輩を召して、之を囲ましむ。厨家、裏銭 (つつみぜに) を奉る。天曆元年宣旨により銭を停む。其の後、珍味を募る。…公卿以下、移りて碁の所に著す。相分かれて念人 (立会人) となす。…)」
- [碁盤の上に置く法会の布施の考証 (1100年)] 『江家次第 (1100年頃成立、故実書)』 (布施の置き場に碁盤が使用される故事)
- [髪そぎの碁盤 (1111年)] 『長秋記 (蔵人・源師時の日記)』 (鳥羽天皇九歳の髪そぎの儀で、摂政の藤原忠実が奉仕。「主上囲碁盤上に立ち給ふ、其儀如凡人」とある。髪そぎの儀式で幼児を碁盤の上に立たせるという故実は、中世以降の公家日記を中心に多くの記録を見る。「其儀如凡人」とあるのは、禁裏ではこの頃既に一般的ではなくなっていたのだろうか)
- [灌仏事、布施を碁盤の上に置く (1131年)] … 『長秋記』 (釈迦誕生4月8日の灌仏会に「布施を碁盤の上に置く」記事。法会の布施の作法のことは、先の故実書『江家次第』に考証があった)
- [髪そぎの碁盤 (1134年)] 『長秋記 (蔵人・源師時の日記)』 (1111年に続く「髪そぎの碁盤」記事。新しく齋院になった令子内親王の髪そぎの儀式)

(16) 【ルール】

○ [事前置石]

(「碁盤の四隅星に白黒各2子をタスキに置いて開局する」いわゆる「事前置石」は、中国では近代まで行われていたとされる。日本の囲碁を語る文芸の「第一着手」の描写で、「事前置石」と断定できる資料は見当たらない)

『続日本後紀』(839年、伴須賀雄と雄堅魚の展覧試合の描写に「雄堅魚は石を二路に下す」とあり、2子のハンデ戦と思われる)

『西宮記』(844年、再度の伴須賀雄と雄堅魚の展覧試合の描写に「雄堅魚及須賀雄碁子二取」とある。これは「事前置石を取り去った」ということか)

『囲碁式 (1199年奥)』(この書には「初番の先手を。ひとしくあらむにをいては。むねとの人若は先達にはうたせずしていそぎすべし。所ををく義なり。聖目に打べし。さげてをくは

日本古代の囲碁史に関わる文献資料リスト

様々しくてけまじき也。次の手は心にまかすべし。先の手をば中聖目に打入べくやとおぼゆ。其故は。中に打つればかさをうたる。中の池をとられず」とあり、「隅の星に配石済みか否か」は読み取れない)

(後世の資料)

『中国囲碁史料集成(2004年、香川忠夫著)』(香川氏は『忘憂清楽集』の棋譜から「予め対角線の星に二つづつ置いてから打ち始める互先置石制で行われている」とする)

○[先手・白石]

『西宮記』『江家次第(1100年頃成立)』(「上首上首が黒を把りて、下藤が白を把る」)

『囲碁式(1199年奥)』(「先石のふたをあけて。黒きを敵のかたへやりて。白を我は取べし」)

『三議一統大双紙(1400年頃成立)』(「主人と碁を参る事。白石を昼は貴人にまいらせ。黒石を夜は貴人に参らすべし」)

『今川大双紙(1400年頃成立)』(「主人と碁双六参る事。主人には白石にてうたせべし。其故は夜など参には。我が石にまぎるゝゆへ也」)

『宗五大艸紙(1528年成立)』(「貴人と碁を参らん時は。盤の上に二ツ候ごけを御好みにまかせて御取候時。残たるを可給。こなたより参らせば白を進ずべし」)

『中嶋摂津守宗次記(1558成立)』(「昼ならば黒を客人の方へをき。夜ならば客人の方へ白をまいらすなり」)

『爛柯堂棋話(江戸後期成立)』(「黒白の碁子を取るに、古は貴賤・巧拙・昼夜によりて差別ある事と見えたり」)

『囲碁語園(2009年成立)』(「白石か黒石かについては、書によって異なる。武家の時代にはどちらともはっきりしなくなっていたのであろうか。また、白黒のどちらから打ち始めたのかも、右の各書からははっきりしない。近世の棋書『碁伝記(元禄7年奥)』に所収する職業棋士たちの棋譜90局の内、白石から打ちはじめている局が26局あるという。白先番の最も新しい局は、正保3年(1648)の本因坊算悦対安井算知の争碁(算悦白で先番)とされ、黒から打ちはじめることと定まったのはごく新しい習慣といえそうである」)

(付載)

[古代の囲碁に言及する近代の資料]

(1) [明治以降発行の書](五十音順)

- 『囲碁語園』(増田忠彦、大阪商業大学発行)
- 『囲碁事蹟考』(江戸後期成立の再版、加納諸平・高井周耕、1943年、私家版)
- 『囲碁全史・坐隠談叢』(安藤如意、広月絶軒ほか補、1941年、平凡社)
- 『囲碁大辞典』(4巻、鈴木為次郎、1981年、誠文堂新光社)
- 『囲碁伝来記』(野上彰、1940年、天元社)
- 『囲碁伝来考』(編者不詳、明治期稿本)
- 『囲碁の源流を訪ねて』(白川正芳、1999年、日本棋院)
- 『囲碁の文化誌』(水口藤雄、2001年、日本棋院)
- 『囲碁の魅力・悠久四千年』(中山典之、1992年、三一書房)
- 『囲碁の民話学』(大室幹雄、1977年・せりか書房、2004年・岩波書店)
- 『囲碁の歴史』(菊池達也、1998年、棋苑図書)
- 『囲碁百科事典』(林裕、1965年・1983年改訂増補、金園社)
- 『囲碁四千年の知恵』(中野謙二、2002年、創土社)
- 『囲碁四千年の歴史』(1995年、日本棋院)
- 『囲碁ルールの研究 理論と歴史』(関口晴利、1999年、文芸社)
- 『群書類従・遊戯部』(塙保己一編、1819年、復刻=群書類従完成会)
- 『(付録)碁史雑譚』(関星月、年不詳、日本棋院)
- 『古事類苑・遊戯部囲碁』(部分、1908年・神宮司庁、1979年・吉川弘文館)
- 『古代囲碁の世界』(渡部義通、1977年、三一書房)
- 『坐隠談叢』(安藤如意〈豊次〉、1904年〈5冊〉、1910年〈『坐隠談叢・囲碁宝典』改定版・関西囲碁会〉、1932年~35年〈『坐隠談叢・囲碁全史』平凡社・広月絶軒補〉、1941年〈平凡社・安永一補〉、1955年・1973〈『坐隠談叢・囲碁全史』渡辺英夫補・新樹社〉)
- 『中国囲碁史料集成』(香川忠夫、2004年、私家版)
- 『中国類書中の囲碁記事』(香川忠夫、2008年、私家版)
- 『物語り囲碁史』(田村竜騎兵、1972年、日本棋院)
- 『悠久の四千年・囲碁の魅力』(中山典之、1992年、三一書房)

『爛柯堂棋話』（4冊、林元美、1914年、復刻版、大野万歳館）

(2) [逐次刊行物の囲碁史論考]

- 「囲碁憲法」（島田拓爾、『囲碁春秋』1939年1～7月）
- 「囲碁合理化の基礎」（安永一、『棋道』1929年1～4月）
- 「囲碁史談」（『ニュー別冊囲碁クラブ』20号、1989年10月）
- 「囲碁史に遊ぶ」（秋山賢司、『碁ワールド』2008年1月～継続中）
- 「囲碁史漫遊」（相場一宏・秋山賢司ほか、『レッツ碁』1986年1月～12月）
- 「囲碁史略年表」（『囲碁年鑑』1990年・1993年）
- 「囲碁伝来記」（野上彰、『囲碁倶楽部』1941年1月～4月）
- 「囲碁と江戸古川柳 吉備大臣入唐絵巻に関して」（越智信義、『棋道』、年月不詳）
- 「囲碁の起源について」（小松田良平、『棋道』1949年9月、1950年2月・3月）
- 「囲碁の原始」（村島誼紀、『囲碁倶楽部』1943年8月）
- 「囲碁の源流を訪ねて」（白川正芳、『囲碁クラブ』1993年6月～1997年12月）
- 「囲碁の歴史」（『囲碁新潮』1958年11月～1959年4月）
- 「囲碁の本邦に伝来せしこと」（後藤秀穂〈肅堂〉、『碁界新報』1909年3月）
- 「囲碁歴史年表」（『囲碁年鑑』1990年・1991年）
- 「異聞囲碁文化史」（沢順三、『レッツ碁』1985年1月～12月）
- 「空蝉と軒端萩の囲碁対局の真相」（室谷洋三、『ノートルダム清心女子大紀要』2003年3月）
- 「絵入版本『源氏物語』の葵図を読む 碁盤に立つ紫君」（久下裕利、『学苑』1995年9月）
- 「寛蓮法師」（岸四郎、『囲碁新潮』1952年3月～終回未詳）
- 「棋史外伝」（岡田東魚、『囲碁』1962年3月～1964年7月）
- 「碁の字の用法の変遷について」（大沢永弘、『遊戯史研究』13号、2001年）
- 「吉備の碁話」（『囲碁雑誌』3の1号）
- 「宮中の式碁」（関節蔵、『碁道』1913年2月）
- 「金花椀図」（小川琢治、『囲碁春秋』1938年4月～6月）
- 「黒白いずれが貴昇」（後藤秀穂〈肅堂〉、『碁界新報』〈方円新報改題〉1908年12月）
- 「玄奘経をもとに中国古代囲碁を考察する」（渡辺英夫、『棋道』1969年3月・4月）
- 「源氏物語」（本遠野普庵、『棋道』1941年4月～6月）

- 「遣唐使と碁師」(関節蔵、『碁道』1916年1月)
- 「庚申待と囲碁」(旧『棋道』8の1号)
- 「碁を打つ女たち・『源氏物語』の性差と遊びわざ」(松井健児、『国語と国文学』1998年11月)
- 「碁界千年の謎」(安永一、『人物往来』1959年5月号)
- 「黑白尊卑の変遷」(関節蔵、『碁道』1913年9月)
- 「故事涓滴」(原橋仙、『碁界新報』1909年10月)
- 「(史伝)碁子考」(関星月、『囲碁世界』1911年5月)
- 「碁聖寛蓮の話」(大曾根章介、『むらさき』1990年12月)
- 「古代囲碁史・幻の源流をたずねて」(安永一、『碁』1975年6月～1976年12月)
- 「古代囲碁逍遥」(渡部義通、『棋道』1975年4月～1977年4月)
- 「古代中国ではなぜ白から打ち始めたか」(劉善承、『棋道』1993年12月)
- 「古代の棋式」(胡桃正見、『碁界新報』1871年10月)
- 「古代の互先置石制に関する一考察」(林裕、『棋道』年月不詳)
- 「碁の起源」(安永一、『囲碁新潮』1961年11月)
- 「碁の起源」(安永一、『週刊碁』1979年11月25日)
- 「(史伝)碁盤考」(関星月、『囲碁世界』1910年4月)
- 「碁盤の変化」(谷岡一郎、『大阪商業大学アミューズメント産業研究所紀要』9号、2007年)
- 「細注日本囲碁史綱」(関節蔵、『囲碁世界』1909年7月～1910年3月、未完)
- 「坐隠物語」(湊晴哉、『棋道』1930年3月～5月)
- 「支那に於ける囲碁の起源と発達」(小川琢、『支那学』6巻3号・7巻1号)
- 「正倉院御物と坊家宝物」(後藤秀穂〈肅堂〉、『碁界新報』〈方円新報改題〉1909年9月)
- 「正倉院御物拝観の記」(『棋道』1941年1月・2月)
- 「正倉院御物物語」(『囲碁雑誌』25号)
- 「正倉院碁盤伝来記」(富永静朗、『囲碁新潮』1978年5月～1979年4月)
- 「正倉院所蔵御物の盤石」(『碁界新報』1の10号)
- 「正倉院蔵木画紫檀碁局について」(増川宏一、『遊戯史研究』6号、1994年)
- 「清末の支那碁」(鈴木為次郎、『囲碁倶楽部』1932年1月・4月)
- 「大中入唐日本王子説」(池田温、1978年、吉川弘文館『古代史論集』に所収)
- 「中国古碁の研究」(小山靖男、『囲碁新潮』1960年1月～7月)

日本古代の囲碁史に関わる文献資料リスト

- 「中国古代囲碁を考察する」(渡辺英夫、『棋道』1969年3月・4月)
「中国の古文献から」(安永一、『囲碁新潮』1960年4月)
「中国最古の碁盤について」(小松田良平、『囲碁クラブ』1960年7月)
「朝鮮の囲碁」(李人植、『碁界新報』1909年4月)
「通俗囲碁歴史」(安藤如意・山田玉川、『碁』1908年10月～1917年6月)
「天平の碁盤」(法城秀祐、『囲碁新潮』1971年4月)
「二千年以前の賭碁」(『棋友』2の9号)
「日本囲碁史関連論考」(高橋敬光、『棋道』1938年12～1939年2)
「日本囲碁史綱・中編」(関節蔵、『囲碁世界』2の9～4の11号)
「日本囲碁小史」(坂田栄男、『アルプス・シリーズ』1969年10月18日)
「日本囲碁史話」(岡田東魚、『棋道』1953年1月～1954年3月)
「日本囲碁通史」(宮川小一良、『碁界新報』1～9巻、未完)
「藤原京、右京三条坊東北坪出土の碁石」(竹田政敬、『遊戯史研究』10号、1998年)
「文化史としての囲碁・将棋」(住谷雄幸、『びぶろす』39巻6号、1988年)
「平安朝文学に見える囲碁」(大曾根章介、『和漢比較文学』1992年12月)
「万葉集の碁檀越について」(秋山賢司、『凡鳥庵だより』2号)
「紫式部から漱石まで」(秋山賢司、『凡鳥庵だより』3号)
「紫式部・清少納言と碁」(渡部義通、『日本古典文学会会報』1979年1月)
「両劫にかせう一ツ」(関節蔵、『碁道』1916年4・5月)
「冷暖石のこと」(後藤秀生〈肅堂〉、『方円新報』1908年8月)

(以下、『囲碁史会会報』(2007年～継続中)掲載論考)

- 「囲碁史探究への道」(南雄司、3号～継続中)
「古代の囲碁世界」(江口洌、8号、2008年)
「囲碁発達史と碁界新報について」(香川忠夫、8号、2008年)
「中国類書中の囲碁記事」(秋山賢司、8号、2008年)
「囲碁の起源」(相場一宏、9号、2008年)
「碁聖、寛蓮こと橘良利 その出身地について」(江口洌、22号、2010年)

